

2020年8月8日お茶会

映画『太陽が落ちた日』トークセッションまとめ

8月8日、ハカルワカル広場ではオンラインで映画『太陽が落ちた日』のトークセッションを行いました。3月1日ビキニデーに開催するはずだった映画会は中止となりましたが、この映画をたくさんの人に観ていただきたいとの思いから、インターネットと測定室での上映により、個々に観ていただいた上でトークセッションに参加していただくという初の試みでした。遠隔地からの参加も可能なため、監督のアヤ・ドメーニグさんにも参加していただきお話を聞くことができるという貴重な機会になりました。

まず、アヤ監督から事前に送っていただいたビデオを上映し、作品の内容を振り返りつつアヤ監督がこの映画に込めた思いを共有してから質疑応答に入りました。

【映画についての質疑応答】

K.S.さん スイスではこの映画を上映しましたか？

アヤ監督 はい。ちょうど今、原爆から75年目をきっかけとして、スイスとドイツのテレビで放送されました。5年前に映画が出来上がったときは、いろいろな映画祭、ローカル映画祭とか世界中で上映されました。

K.S.さん 世界中でたくさんの方が観て、原爆が75年前に投下された段階で、またその後75年間苦しんだという事実を知ってくださるといいなと思いました。

E.S.さん 何度観ても素晴らしいのは、アヤさんがおばあさまのことを大切に思っていて、それがあらゆるところにしみ出ているのが私たちの心情に響くのだと思う。取材にどのくらいの時間をかけて撮られたのですか。

アヤ監督 2010年に撮り始め、祖母がアルバムを観ていたシーンは2011年、撮影し終わったのは2013年なので撮影期間は4年ぐらい。祖母は最後の頃2013年5月はまだ元気で、短歌も読んでいましたが、その年の10月に亡くなりました。抗がん剤の治療が始まると調子が悪くなって亡くなりました。

A.I.さん 映画の最後の短歌はおばあさまが作られたのですか。

アヤ監督 短歌はすべて祖父が作ったものです。

A.I.さん 最後の短歌はいつごろ書かれたものなのですか？

アヤ監督 祖父の晩年に書かれたものです。←後日、メールで訂正がありました。最終ページ参照。

K.K.さん 外国で上映したそうですが、その時の外国の方の感想で印象に残るものがあれば教えてください。

アヤ監督 スイスで上映した時に、アメリカ人が私の方に来て、歴史の知らなかったことをこの映画を観てわかるようになったとショックを受けていました。ずっとアメリカに住んでいたのに、原爆後に、原爆について話してはいけないとか、医者が内部被曝について誰にも教えてはいけないと言われていた7年間の厳しい時期があったことなどを全く知らなかったようです。70歳以上と思われる方でした。スイス人などは、映画に出てくる人物の中でも内田さんが大好きで、内田さんの

キャラクターは世界中で通じると思いました。

K.H.さん 私も内田さんが好きなのですが、その内田さんのところに福島の子が避難して来ていて、当時、避難したいと言うと親からも頭が変になったというように言われて辛かったというのがリアルでした。福島の方は大変だったのだなと思ったのですが、あれはいつごろ避難されていたのですか。

アヤ監督 彼女は、原発事故直後まず秋田に避難して、広島に来たのは 2012 年の夏。内田さんは彼女だけではなく、他の人もホームステイで受け入れていました。

K.H.さん 内田さんに受け入れてもらって、福島の方も癒されたのではないかと思い、よいシーンだなと思いました。

S.I.さん 私の百歳近い祖母、義理の父も子供の頃に戦争を体験しているのですが、なかなかそのことを話づらいです。アヤさんはおばあさまに普段からそういう話を聞いていたのですか？

アヤ監督 私も祖母にあまり聞いていませんでした。祖父が生きていた間は何回も原爆について聞いていたけれど、家族の中で、原爆はあまりテーマになっていませんでした。

S.I.さん おじいさまは嫌な顔をせず普通に話してくれていたのですか？

アヤ監督 あまり話しませんでした。自分で経験していないからと言っていました。祖父が亡くなった時私は 19 歳でしたから、聞いた記憶はありますが十代なのでつつこんで聞きませんでした。

次に、「広島・ビキニ・福島を考える」というテーマのトークセッションに移りました。はじめに二宮さんが、核と原発の歴史がひとめでわかる年表をスライド上映しながら解説し、その後、4人のメインスピーカーがそれぞれの思いを語りました。

【核と原発の歴史】（二宮さん）

核の歴史は 1945 年 7 月 16 日のニューメキシコの核実験で始まった。その時も近隣住民は被ばくしている。そして、同年 8 月 6 日の広島、8 月 9 日の長崎への原爆投下があった。その後も核開発は続き、軍事用の原子炉での事故も多発した（1952 年のウラル核惨事など）。その後、第五福竜丸、マーシャル諸島の人々が被ばくした 1954 年 3 月 1 日のビキニ水爆実験など核実験は大型化していった。1960 年代は特に核実験競争時代で多くの核実験がアメリカ、ソ連以外の英国、フランス、中国、インドなども加わり行なわれた。日本にも多くの放射性物質の降下があった。その後、スリーマイル島、チェルノブイリ原発事故があり、原発の燃料を開発するためのウラン採掘による被ばく、劣化ウラン弾による被ばくもあった。そして、2011 年 3 月 11 日の福島原発事故。年表の上部の赤い帯は核の量を示すが、増加の一途をたどり、広島・長崎から 75 年後の現在に至っている。しかし、核をなくすため、たとえ小さな努力でも続けていけば、この核の量は次第にゼロへと近づくのではないかと希望を持って活動を続けていきたいと思う。

[「核と原発の歴史」スライドはこちら。](#)

【メインスピーカーの意見】

相澤さん 私の母も当時広島に住んでいましたが、8 月 6 日は田舎に帰っていたのでたまたま原爆には遭いませんでした。一週間後に様子を見に広島に入った入市被ばく者でしたが、亡くなるまで被ばく者手帳を申請しませんでした。私は緩い意味で被ばく二世になります。母も、アヤさんのお

じいさまと同じように原爆のことをほとんど話してくれませんでした。おじいさまが言われたように、経験していないと本当の意味ではわからないということだったのかもしれませんが、もう少し話してほしいなという気持ちはありました。おじいさまが家族愛にあふれた短歌を残したように、今ある平穏な生活がとても大事だと思っていたのかもしれませんが。（映画に出てくる）肥田先生や内田さんのように体験を話してくれるということは、知らない私たちを信頼しないとかなかなかできないことで、それをしてくれた人たちなのだと思います。私はハカルワカル広場に関わるようになって、ビキニ実験のすることなどを知ることにより、原爆で被ばくしたということだけではなく、いろいろな意味で世界中の人が被ばくしているということを知りました。そういう意味で、広島や長崎のヒバクシャだけでなく、世界中の人がみんなヒバクシャだという観点に立って主張していくということが核を廃絶していくことにつながっていくのではないかと思います。

鵜飼さん この映画を何度も観ましたが、観るたびにいろいろなことに気づかされるいい映画だと思います。僕自身、母を4年前に癌で亡くしました。母は諫早出身だったので、自分も子供の頃はよく長崎に行くことがあって、平和公園に行ったりして、原爆のことを歴史的な事実として知ってはいましたが、核の平和利用に疑いさえ持たなかった。福島原発事故があって、ハカルワカル広場で活動するようになって原爆と原発がつながっていると思った。核の問題は日本人だけではなく世界中の問題だということに改めて気づかされました。グローバルヒバクシャという言葉があって、放射能の被害は広島、長崎だけではなく世界中にある、アメリカ人も被ばくしているし、マーシャル諸島の水爆実験の被害者もいまだに苦しんでいる。そういうことを知り、核兵器を使うこと自体が悪魔的、人間として許してはいけないことだという意識を持つことが世界全体のために大切だと、日本人が発信していくことが大事だと感じた。肥田さん、内田さんのように諦めずに語り続けていくことが未来につながるという希望をもちました。

上田さん 被ばくの実相を知ることそのものが平和への一番の近道だと思う。私は3歳被ばくなので記憶はありません。今でも本籍地は平和公園の中、爆心地から400m以内のところですよ。原爆も原発もそうですが、核物質は絶対に人類とは相入れない、まずはこのことを訴えたいです。使用済み核燃料棒、プルトニウムはなんの役にも立ちません。ガラス固化して地中深くに10万年保存ですよ、それしか方法がないのです。そういうことをしなければいけないものを、今の私たちが使っているのか。10万年後の人類に、これは危険なものだという表示は絶対にわからないと思います。絶対に共存できない。もう一つ強調したいのは、原爆投下は、人体実験だということです。数日前の新聞にも出ていましたが、当時のアメリカ軍の内部では、原爆投下は必要ない、というのが常識でした。全国で200カ所も空襲に遭って、制空権がない、日本が降伏するというのは軍部から見ればあたりまえだった。それでもポツダム会談が開かれる前の日に投下した。7月16日にニューメキシコ、その20日後に広島そして長崎、3つ作ってみんな使った。私は核を減らすのではなく廃絶だと思っています。2017年7月7日、国連で122カ国の賛同で核兵器禁止条約が採択されました。涙が出ました。現在、賛同署名した国が82カ国に増えました。批准した国は3カ国増えて43カ国です。あと7カ国が批准すれば、いよいよ核兵器が悪魔のレッテルを貼られる、核抑止論が否定される、そういう時代に必ずなると思います。今私たち人類は画期的な時期に生きているのではないかと。大いに希望がある。被爆者の平均年齢は83歳になりました。2016年春に始めた被爆者国際署名、今、国連に1184万筆出しました。これが核兵器をなくす大きな原動力になると確信しています。

西田さん 私には内田さんが一番魅力的で、強い印象を持ちました。内田さんは自分が原爆症であり、その病を直すのに自然の力を使って、汗をかいて直すという方法を見つけました。また彼女の

やっていることが心を打つのです。ハカルワカルの活動と重ねて見てしまうのですが、彼女がやっているドクダミを作って福島に送るとか、自主避難の親子を自宅に泊めて面倒をみるとか、自分にできるささやかなことを一生懸命して、自分の生活の中で原爆反対を訴えている。彼女は原爆症なので原爆のことはよくわかっていて本当に反対なのですが、それを日常の中でささやかなこと、ちいさなことをして行っているというところに心を打たれたし、この映画で私たちの活動についても教えてもらった気がする。ハカルワカル広場は、八王子にある原発事故の後にできた放射能測定室で、食品や土壌を測定するほか、このようなイベントを開き、放射能の危険を一人でも多くの人に知ってもらう活動をしている。そういう、たとえ小さなことでも、みんなが意識をもってやるのが、原爆や核の廃絶につながっていくということを感じさせてくれる映画でした。アヤ監督に、この映画に出会えたことを感謝しています。

【参加者からの意見】

鵜飼さん おじいさんが原爆のことをあまり語られなかったと話されましたが、原爆を経験していない人に話すのは大変だったと思うし、なかなか言葉にできなかったのだろうと思うが、それでも（孫の）アヤさんがこの映画を作って、後世に伝えてくれたことをすごく喜んでいるのではないかと思います。

映画の中で、おばあさんがすごく幸せそうだった。撮影の1ヶ月後に亡くなられたというのはすごく悲しいことだけれど、孫がこういう映画を作ってくれて、お話ししている姿が幸せそうだった。映画はアヤさんの家族にとっても僕たちにとっても意味があった。内田さんの姿に日本人だけではなく世界中の人が共感した。自分の家族の経験を通じて、人類全体のことにつなげていくというのは素晴らしいことだと、この映画を観て思いました。

K.H.さん 私も上田さんがおっしゃった朝日新聞の記事に希望をもちました。日本人を使って原爆の人体実験をして酷いなと思っていたのですが、アメリカ人や私たちも、戦争を早く終わらせるために原爆投下は必要だったというアメリカが正当化する説にずっと洗脳されていてそう思ってきたのですが、数日前の朝日新聞の記事で、今のアメリカの若い方の75%ほどが戦争を終わらせるのに原爆を使う必要はなかったと思っている、というのがわかって、昔からの洗脳がだいぶ解けてきていると嬉しく思いました。明るい希望を感じました。

上田さん 私もアメリカに何度も行っていますが、どこへ行ってもまずパールハーバーと言われます。真珠湾を攻撃したのは12月8日。その日にはTVが一斉にその映像を流すんです。そして例によって原爆の投下が数百万人の命を救ったと、全国で流れるわけです。それはもう、影響をうけないのはおかしいですよ。私は1982年に海外に行って話す機会があったのですが、次が私の発言する機会だったのに、上田さん時間がないからといって発言の機会を与えられなかった。退職して2003年からいろいろなところに行っているのですが、私の体験だけですが、ヒバクシャとして朝昼晩と引っ張りだこです。行くと必ず、例えば原爆の父といわれたオツペンハイマーが卒業した学校でも同じようにパールハーバーをどう思うかと聞く。学校の先生は、何故そうなるかと子どもたちが考えることを教育の基本としている。あたりまえですね。本当にいま変わってきている。私は当然、加害責任にも触れます。軍事施設といえども攻撃していい理由はない。日本とドイツとアメリカが戦争を起こして世界で5000万人が亡くなったわけです。謝罪から入ります。しかし原爆を使ってもいいとは言えないでしょ。そのことを話してもいいですか？と聞く。話すとね、全てのところでハグですよ。ここに人間の素晴らしいところがあると思います。パネルを見て、ヒバクシャの

話を聞いて、あの実情を知れば、原爆を使っていいなんて思う人はだれもいません。被爆の実相を知ることが平和につながる一番の近道というのはそういうことです。

K.S.さん) アメリカの人たちの意識が変わってきているというのはすごく嬉しいのですが、その反面、日本の教育あるいは日本の姿勢がなんだか反対の方に行っているような感じがしてなりません。平和教育と言われていたようなものが少なくなったと聞いている。政府の姿勢が、8月6日の安倍首相のスピーチを見ましても毎年の繰り返しの内容のないものです。非核三原則を維持していくと、よくも白々しく事実を反することを国のトップが言えるものだ、と失望を感じます。日本は原爆で苦しんだ方がいるし、内部被曝が続いて苦しんできている、それに対して本当に向き合っているのかしらという悲しさと腹立たしさを感じています。そういう面では非常に悲観的です。でも希望を失わないで、地道なところからしていかなければいけないというのは西田さんのおっしゃる通りだと思うので私も小さいですけど自分にできることを続けていきたいと思います。

A.I.さん) いまアメリカの若者の原爆に対する気持ちが変わってきているというお話があって、それは、大規模な虐殺がいけないということが定着してきたのだと思いますが、トランプ大統領が使える核兵器といって小規模なら使ってもいいということを行っているのが心配です。爆発の規模の問題ではなく、放射能のその後の影響、その地を長く汚染し、人も生物も全部汚染されて被害を受けるということをあまりにもわかっていない、考えていないから言えることです。原爆が悪いものだというのはわかってきたけれど、原発となるとわからないというのは、やはり放射能の害がわかっていないからではないかと思う。映画では、原爆の爆発そのものよりも、その後の人々の苦しみとして、肥田先生の内部被曝の話がクローズアップされているのがとても大事なところで、そこを世界中の人がわかるように頑張っていかなければいけないと思いました。

【まとめ】(西田さん) これからもハカルワカルの活動は、核兵器、原発をゼロにするということに向かって小さな努力を続けていきたいと思う。また放射能の危険性を伝えていきたい。原爆の破壊力だけではなく、後からじわじわと遺伝子に影響して来る放射能の危険性というものを強く訴えていかなければいけない。そして全人類がヒバクシャだとのグローバルな観点をもちつつ、活動は地域でやっていくという着実さが必要だろう。上田さんに見習って確実な活動をやっていくことにつきると思う。アヤ監督が自分のおじいさんの原爆体験を撮っておきたいと思い撮り始めたこの映画が、単に家族の物語ではなく、全人类的な視点をもった核廃絶運動につながる映画になっている。そして、内田さんが登場することで、私たちに希望を抱かせる内容になっている。アヤ監督とトークセッションのすべての参加者に感謝します。

アヤ監督) 過去のことは現在を考える上でとても大事です。過去に起きたことは終わったのではなく、気づかぬうちにまた繰り返します。原爆が街を破壊したくさんの人が死んだ、というだけではなく、その後、人々はどのようにその惨劇に向き合ったのか、それが私の映画のテーマです。そしてそれは福島の後でも繰り返されています。ですから、いま日本でとても大切なことは、人々が福島で実際に起きている本当のことを語り、ジャーナリストが調査して日本から情報を発信することです。いろいろな情報が流れているけれど、真実が語られていないのが問題です。たとえば「ハカルワカル広場」とか「みんなのデータ」とか、日本で汚染のデータを集めるのはものすごく大事だと思います。いま福島はオリンピックとのからみで粉飾され、これは次の私の映画のテーマなのですが、福島はアンダーコントロールだという途方もないプロパガンダが世界に向けて発信され、

人々はそれを信じてしまっています。私はスイスに住んでいますが、スイスの人たちもニュースを信じています。

広島原爆記念日にはたくさんの映像がテレビに流れますが、それは75年前のことであって、今起きていることとのつながりはありません。ドイツの第二次大戦時のホロコーストにも同じことがいえます。同じようなことが起こり、同じような構造が社会や政治の場でも繰り返されているのに私たちは気づいていません。私たちはもっともっと、過去の出来事を現在と繋げるように努力しなければいけません。教育を見直し、子どもたちが自ら考えることを学び、インターネットで情報を集め、今はネットの情報が多すぎて何が真実で何が真実でないのか誰にもわからないのですが、深く調べて自分の意見を持つことがとても大事です。いろいろな変化もあり、戦争を繰り返してはいけないというだけでは、今の子どもたちにとって戦争は遠い過去のこと、歴史の本に載っている抽象的なことになってしまって、自分とのつながりがわからない。ですから、つながりをもたせることがとても大事です。

アメリカの若者の75%が、戦争を終わらせるために原爆は必要なかったと考えているということに興味深く聞きました。知りませんでしたがとても励まされます。一方でドイツの大手テレビ局が作ったドキュメンタリーフィルムでは、相変わらずアメリカの見方、戦争を終わらせるためにどうしても原爆が必要だったという見方を繰り返している。まるで核兵器を祝福しているかのように。ドイツの文化的に良質な番組を作っているTV局がそのような番組を流しているのにショックを受けました。日本のことをよく知らないようなヨーロッパの人々がそのドキュメンタリーを見たら信じてしまいます。人々がもっと教養を身につけ、批判的にものごとを見るようになり、TVで見たことをそのまま信じたりしなくなるのが重要です。

ここでトークセッションは終了しました。アヤ監督が英語で話した部分は、二宮さんがその場で日本語に通訳しました。また後日、アヤ監督からメールで、映画の最後に引用されるアヤ監督の祖父が作った短歌について以下のようなコメントをいただきました。

橋をわたり ころろ静かになりゆきつ

葦原の砂に しばしたちたり

アヤ監督 実はトークセッションで、祖父がいつこの短歌を書いたのか、という質問に答えた時、私は別の歌と混同してしまっていたのです。あのとき私は、祖母が病床で最後に読んでいた短歌のことを考えていました。それは、祖父が晩年に書いたものだったのです。けれども、上に引用した短歌、映画の最後のところで、観客が黄昏時の古びた田舎の家を見ているときにどこからともなく聞こえてくる短歌は、実は私の祖父がとても若いときに書いたものだったのです。祖父はそのときまだ高校生でした。原爆という災難に遭わずと前に、あの歌を書いたのです。ですから二つの極端に違う世界（原爆直後の広島と、家族の待つ平穏な世界*編集部注）を行き来していたときに書いたものではありません。まだとても若かったときの彼の感情を表現したものなのです。私にとって、あの映画の終わりは、（生の）サイクルを閉じるという意味をもちます。若き日の祖父と、亡くなってしまった祖父。そして（生と死をつなぐ）橋を渡る祖母。死後、人はみな同じところへたどり着き、世界の騒音と苦しみは消え、静まり返る。うまく説明できませんが、これがまさに私が感じたことで、この映画の最後にこの短歌を選んだ理由なのです。（翻訳：石井暁子）